クリストファー・スティヴンズ　インタヴュー

2024/4/2　14:30-20:00
クリストファー・スティヴンズ邸

聞き手　福永信　尹志慧
構成　　福永信

――レコードがたくさんありますね。

クリストファー・スティヴンズ（以下、クリストファー）　うん、ちょっとぐらい減らさないと、部屋に入りきれなくなるから困っているんだけど、できてない。DVD もいっぱいあったけど、もうほとんど友達にあげたし、残ってるのはそこにあるぐらい。DVD よりもレコードの場所がほしいです。

――図録は 1 冊もないな（笑）。

クリストファー　2 階の押入れに突っ込んであって何百冊あるかわからないね。ほとんど見ないから（笑）。でも、レコードを置く場所はほしい。さっき 2 枚レコードが届いたところなんですが、それを聴きながら話をしますか。ああ、（会話を）録音するなら、かけない方がいいね。

――クリストファーさん、今日はいろいろ、たくさん訊きたいのですが、まず翻訳のことから。英訳はどんなふうに進めるんですか。

クリストファー　まず全部読まない。読んでから訳すとかではなくて、最初から少しずつその順番で訳をしていくね。そうしないと退屈する。読みながらだと、どうなるか、どうなっていくかと思うじゃないですか。ミステリーがある方がやりやすいですね。

――読むように英訳しているわけですね。

クリストファー　そうですね。もちろんつながり方とかは考えます。日本語ってけっこう長い文が多いじゃないですか。それをそのまま英語にしてもよくないから、いくつかに切ることもある。まあでもやっぱりね、楽しめるようにやろうと考えてますね。訳しながら、そうか、こういうことか、とか、そんなふうに思いながらやっていきます。終わってから読み直す作業っていうか、最後に細かい調整をして仕上げをする作業っていうのはもちろんあります。最初から全部読んだ方がいいかもと思うことはあるんだけど、やっぱりできない。

――ライヴ感がありますね。面白い。

バンド

――ミュージシャンとしてAssholesというバンドで活動されていたと、検索するとプロフィールに出て来きますね。

クリストファー　まあ、そこまでミュージシャンとは言えないと思うんですけど、一応ね。14 歳の時に、同じ中学の友達と一緒にね、3 人でバンド活動してて、ライヴとかもちょっとだけやってたんですけどね。当時はKISSとかエアロスミスとかが好きでした。僕が生まれたカリフォルニアでもその時期、ハードコアで面白いバンドがいっぱいあったから、我々もやっぱりそれらに興味があったんだね。70 年代の後半ですが、当時は、世代的にアナーキーという共通の思想がありました。でも全然物足りなくて、僕らはtrue anarchyでなくちゃいけないと思っていた。乗り越えなくちゃいけないと思ってたんです。1分くらいで終わる過激な曲が当時あったけど、「じゃあ僕らはもっと短くする」って言って、バッと音を出して一瞬で終わる曲とか（笑）。流行ってるものをそのままコピーするんではなくて、それへの反発というか、解釈だったりとか、そういう感じでやってました。普通に演奏してたら充分にアナーキーじゃないって思っていたね。観客にマイクを渡して勝手にしゃべってもらったり、「本当のアナーキーを実現しよう」とメンバーが楽器を交代して演奏したり。僕はベースだったけど、ドラムをやって、ドラムのやつがギターをやり、ギターがベースをやる、という感じに、くるくる役割を変える。交代して演奏するとヘタになるんですよ。それがアナーキーだ、と。でも、担当楽器がそもそも別にうまくなかったから違いがそんなに出なかったけど（笑）。カリフォルニアのハードコアパンクバンドBLACK FLAGの前座をやったりしましたね。

――プロフィールによると、「客の暴動による公演中止を最後にサンフランシスコで解散」とありますが。

クリストファー　そうそう、ちょっと暴徒化したというか、危ないと会場側が判断する事態になった。僕らは気にしなくて、さっき言ったように、客席にマイクを渡したりしながら演奏してたんだけど、会場側の判断で電源が抜かれちゃって、「あれ、音出てないな」って（笑）。それが最後の演奏だったかな。そのあと、少しスタジオでやったりしたような気もするけど。

――バンドの音源は、Bandcamp にありますよね。

クリストファー　そうです。メンバーだった 1 人が今はサンディエゴにいて、デザイナーをやりながら、ミュージシャンも続けてやってるんですね。彼が、音源を管理してますね。もう 1 人のメンバーはニューヨークにある、昔のお金持ちが作ったモルガン・ライブラリーで、美術館にもなってる場所があって（The Morgan Library & Museum）、写真の学芸員になってます。そこで写真の学芸員をやるのは彼が初めてだそうですね。まあともかく彼はニューヨークの大学に行って、僕はフレズノで、もう 1 人がサンディエゴ、それがバンド活動が終わった理由ですね。友達が離ればなれになったからね。11 年くらい前かな、久々に 3 人揃ってライヴをティフアナでやりました。サンディエゴに住んでるメンバーが企画して、その時も 3 人、何も準備なしでしたが。

――再結成ライヴ、どうでしたか？

クリストファー　音楽としてはあんまりよくなかったんじゃないかな？　よくわからない。練習する時間もなくて。ていうか、なくてもいいと思ってたし。14、15 歳くらいの感じ、昔に戻るような感じはあった。まあ、でもね、もういいや、ぐらいの気持ちでもある。そんなに覚えてないしね。他のバンドもいっぱい出てたから。なぜライヴをすることになったのもよく覚えてない。お客さんもそんなに感動してなかったと思う（笑）。

――いいですね。感動の再結成じゃなかったんですね。感傷的ではないし、予定調和が何より嫌いでしょう。

クリストファー　それが僕のテーマですね。

――さっき伺った翻訳の仕方がまさにそうでしたもんね。

クリストファー　そうです。読んじゃうと退屈しちゃう。

――でも日本には退屈してないですか？

クリストファー　（即答して）してないですね、それは。

学生時代

――カリフォルニアでは、バンドをやりながら、どんな中学生、高校生だったんですか。

クリストファー　14 歳の時に、フレッシュマンスクール（freshman school）っていう 1 年だけの中学に行っていて、バンドのメンバーとはそこで出会ったんです。そのあとに高校は 1 年しか行ってない。今はどうかわかんないんだけど、当時のカリフォルニア州では試験があって、その試験が合格できる人は、まあ高卒と同じ意味になるから、（義務教育を終えて社会に）出て行こうと思ったら出て行ける。本当は 16 歳じゃないと出られないという法律だったけど、私たちはそれを受けて合格して 15 歳で出て行ったんです（笑）。先生には「残ってほしい」みたいに言われたけど、そんなの残るわけない。学校大嫌いだ（笑）。大嫌いだからテストに合格したのに、出て行かないわけがないでしょ。無事出て行くことができて、それで 15 歳の時に大学に入ったね。

――15 歳で大学に行ったんですか？　すごい。天才少年じゃないですか。

クリストファー　飛び級とも違うんだけど、バンド仲間もそうでしたね。僕が行ったカリフォルニア州立大学の学生は、まあ大体 28 歳ぐらいが平均だったと思う。いろんな年齢層がいるんです。1 年だけ行って辞めるとか、また入って卒業するとか、そういうのが多いから。そうだ、歴史のクラスを受けていた時、レーガンが大統領になった選挙の年（1980 年）だったけどね、選挙の話をそのクラスでやっていて、その先生が「みんな、とりあえず投票できますよね」みたいに言って、「できない人いますか？」とかなんとか。で、一番後ろの席にいた僕だけ手を上げて、「15 歳だ」と言ったら、さすがにみんなのキョトンとなったな。

――大学では何を学んでいたんですか。

クリストファー　英米文学を専攻しました。教えることにも興味があったから、幼稚園でも教えた。大学にはライティングセンターみたいなところがあって、論文が自分で書けない、僕よりだいぶ年上の人が相談に来ているんだけど、そこでライティングをサポートしたりもしてた。

――10 代なのにすごいですね。

クリストファー　教えるのは好きだから。今でも大学やプライヴェートな教室で英語を教えてますけどね。30 年も続いているのもあって 80 代の人もいます。ほぼ全員女性で、まあみんなおしゃべりするのが目的かもしれないけど（笑）。

――きっと楽しいんでしょうね。

クリストファー　そうですね。まあ、僕が大学を卒業したのは 20 歳でしたが、大学院に進むか、日本に来るかみたいにちょっと迷いました。日本に行く選択肢は最初からあったんです。子供の頃から、招き猫とか鯉のぼりとか、ダルマとか、それ系のものがいっぱいうちにあって（笑）。母が日本の美術が好きだったから。彼女の影響もあったし、80 年代の日本はとても面白そうに思えて、レコード、全部売ってしまって、スーツケースひとつだけで、日本に来たわけです。一応、アメリカの大学院にもいくつか申し込んだんですけどね。でも、お金がそんなになかったし、日本に来たら仕事がありそうに感じて、まず日本に来た。そしたら、こっちに来てから、ワシントン D.C.にある大学院から「奨学金を出すから来ないか」みたいに言われたから戻ったことがあります。でも、1 年で辞めて、日本に帰った。やっぱり日本の方がいいから。

来日

――どこがそんなに？

クリストファー　一番大きな理由は、その当時付き合ってた彼女がいたから（笑）。大学院も面白かったけどね。好きな街ではあったし、勉強も楽しかったんですが、大学の先生になるのは難しかったんです。仕事がない。そんなんだったら日本に帰って、日本なら仕事いっぱいあると思ったから。で、戻って、

英会話教室で働いてましたね。22 歳だから、1986 年か。バブルの時代でした。今でも、たまに、ワシントン D.C.に残ってたらどうなったかなとか思うけど、でもやっぱりこれがよかったと思うね、日本に帰ってきて。

――日本語は最初から勉強してたんですか。

クリストファー　いや、あまり勉強してなかったね。しばらくは、なんかもう自然に覚えられるかなと思ってたけど、無理だった。2 年間ほど YMCA の日本語学校に行きました。「もうずっとこの国におるんやったら、ホンマにちゃんと日本語を覚えないとアカンなあ」と思って（笑）。特に漢字が好きで、いっぱい覚えようとしてましたね。会話はあんまり上手じゃないから、しゃべるのが苦痛だったね、昔は。それは日本語だからというより、英語でもやっぱりそんなにしゃべらない。でも、新聞とか読みたいなと昔から思ってて、本が読みたいから勉強しましたね。日本文学にも、もちろん興味があったからね。谷崎（潤一郎）が読めたらいいな、とかさ。

――もう読めるぞ、いろいろ書けるぞ、ぐらいになってくるってどのあたりでしたか。

クリストファー　日本語能力試験があるじゃないですか。それの 1 級(N1)をとったというのはあるけど、でもね、それだけでは翻訳できないからね。翻訳は特に仕事にしようと思わなかった。ただ、不思議な偶然があって、僕は暗黒舞踏とかもすごい興味があった。YMCA の日本語学校に通いながら白虎社に出入りするようになったんですよ。先日、天児牛大が亡くなりましたけど、山海塾を 10 代の頃、テレビで見て衝撃だった。すごく面白いと思って見ていました。で、まあ、舞踏が好きになったということがあったので、関西に住むようになって、白虎社の舞台を見ていたんですね。それで事務所に出入りするようになり、そこで海外への手紙や書類を翻訳することになった。海外公演では通訳をしたりしました。まだその時は、26 歳くらい、そんなに役に立たなかったかもしれないけど、それが僕の翻訳の仕事の最初ですね。

両親

――クリストファーさんのご両親はどんなお仕事をなさってたんですか。

クリストファー　2 人ともカウンセリングの仕事をしてました。カウンセラーで

すね。たぶん毎日いろんな人の話を聞いていて疲れていたんでしょうね。「仕事イヤだなあ」みたいに親がいつも言ってたのを見てたから、自由な、フリーな仕事をやりたくて、今のようになってるのかもな。でも、実は、僕も、よく相談に乗ってあげるんですよ。昨日もそんな電話が友達からかかってきたし、昔から、子供の頃からずっと、何かあるとみんな寄ってきて、悩み相談になるというか、話を聞いてあげるという。やっぱりカウンセラーの血をひいてるんだと思う（笑）。答えを知りたいというよりも、聞いてもらいたいっていうことでしょうけどね。主に恋愛相談が多かった。恋愛相談だけじゃないけど、まあ、離婚しようと思ってるけど、どう思う、みたいに。「どう思うって、さっさとやった方がいい」って答えるんだけどね（笑）。

――背中を押してほしいんですかね。

クリストファー　そうですね。まあ、僕も離婚してるから。それこそやっぱり経験上、もう絶対やった方がいいですよ（笑）。そこまで悩んでいるんだったら、それはやっぱりすぐにするべきだ。

――クリストファーさんは、離婚されるときにささっとされたんですか。

クリストファー　時間かかったね（笑）。でもやっぱりね、「バツイチ」って言うでしょ。あれはよくないよ。だから「マルイチ」と考えましょうと、僕、いつも言うしね。悪く考えないのが大事なんですよ。よかったと思うことが大切なことで、すべての経験がいいと思ってるから。「マルイチ」っていいでしょ。「マルニ」「マルサン」でもいいじゃないですか（笑）。

――ご自身でカウンセリングを受けたいみたいな気持には全然ならないですか？

クリストファー　自分の悩みを言うっていうのは、あんまりしないですね。まあ、だいたい自分でできることは全部自分でやりたいみたいなことが多い。翻訳とかも、ずっと１人でやってるじゃないですか。だから、１人のことが多いですね。

翻訳/XEBEC

――確かに 1 人でやる作業で、ぴったりですね、翻訳は。白虎社で始まったと

おっしゃいましたが、本格的にはどんなふうに始まったんですか。

クリストファー　XEBEC Hall（ジーベックホール）という音楽ホールが、神戸に、80 年代の終わり頃にできて、その XEBEC のプロデューサー、C.A.P.もやっていた下田（展久）さんと出会ったのは大きかった。彼と知り合って XEBEC が刊行していた「Sound Arts」って雑誌の翻訳を手掛けましたが、それが初めての本格的な翻訳の仕事ですね。当時の XEBEC は面白いですよ。現代音楽とかインド音楽とか取り上げたり、藤本由紀夫とかもやったのが、ここだったでしょう。ブライアン・イーノのヴィデオインスタレーションを最初にやったのもここですね。XEBEC はサウンドアートの展覧会をよくやっていました。「具体」の人々とも関係があったし、僕もそこで彼らと出会いました。山崎つる子、白髪一雄、松谷（武判）さん、そうそう、松谷さんからはその後、翻訳を頼まれたりしました。「具体」の人らとの出会いから西宮北口にあった「メタモルフォーゼ」っていうバーに行くようになり、村上三郎の紙破りも、XEBEC で実際に見て、これはすごかったですね。やっぱり本物が見れたのがよかった。すごいパワーがあった。吉原治良の息子さんとも XEBEC がらみで友達になりましたね。僕が 30 代のときです。僕の元妻ともここで知り合いました。XEBEC に出入りしていたことで、企業のパンフレットの翻訳とかがぼちぼち入ってきました。のちに国立国際美術館の学芸員になる中井（康之）さんと出会って、それで図録の翻訳の仕事が広がったんだと思います。今では XEBEC を研究する人まで現れるくらい歴史的な存在になってますけど、当時はそんなこと思わなかったな。

――XEBEC、すごいですね。

クリストファー　そういえば、ラジオ番組をやったことがありました。西宮のミニ FM（さくら FM）で岩淵拓郎さんという、やっぱり XEBEC と関係ある人ですが、その人と一緒にやった。「パラレルワールド」っていう番組で、毎回テーマを決めて、それに合わせて選曲する。例えばテーマは「スポーツ」とか「殺人」（笑）とか。一度、岩淵さんが出られない時があって、1 人でやらなくちゃいけない。聞いてる人が目の前にいないし、不安で、間が持たないから、曲をいっぱい流すしかなかったな。そうそう、熱心なファンがいて毎回ファックスを送ってくれたりしたんだけど、彼が受験生だったから 1 回、彼のお母さんと電話でしゃべるなんてこともあった（笑）。なんか、それこそ受験の悩みになって、また悩み相談を受けてね、クリストファーさんは受験の時どうでしたか、とか訊かれたから、「僕は 15 歳で大学に」とか（笑）。

――参考にならないですね（笑）。

クリストファー　まあ、でも、カウンセリングの血が流れているから（笑）。

翻訳/Kansai Time Out
――いろんな人との出会いがあったんですね。

クリストファー　ネットワークがすべてではないですか？　英文の情報誌「Kansai Time Out」には最初、ライターとして関わってましたが、だんだん編集も任されるようになって、その後、編集長になりました。それも人のつながりによるものですね。僕の代で休刊（2009 年）になったので最後の編集長でしたが、12 年くらい編集部には在籍しました。この雑誌がよかったのは、好きなようになんでも書けたこと。日本赤軍の重信房子の娘にも取材したことがありましたし、村上春樹にも会いました。ちょうど『アンダーグラウンド』とか『スプートニクの恋人』のあたり、彼があんまりこういう取材を受けてなかった頃でしたが、外国人用のメディアだったので受けてもらえたのかな。東京まで行って、青山にあった事務所でね、同僚と一緒の取材だったから英語で話しました。音楽の話もちょっとしましたね。面白い経験だった。村上春樹はそこの香櫨園小学校に通っていたから、なんか不思議な感じがしますね。あと、小田実ですね。彼を取材しようと思ったのは、学生運動に興味があったからなんですが、ベ平連（ベトナムに平和を！市民連合）を紹介しようと思ったんです。で、どうやってコンタクトをとろうか、そもそもどこに住んでいるのだろうと思って、やっと連絡してみたらすぐそこに住んでた（笑）。海のすぐ近くのマンションの一番上の階でした。「近く？　じゃあ、こっち来いや」って言われて、それでマンションに行って、友達になった。小田さん、すごくいい人だったな。テレビで見る限りはなんだか難しそうな人だったけど。

――「Kansai Time Out」で編集の仕事を始めた 33 歳の時、もうカタログの英訳の仕事も並行してなさっていますね。

クリストファー　編集部に通いながら、もう家に帰ると翻訳ですね。事務所に行くのは週に 2 回ぐらい。うちに持ち帰ってやることもありましたが、まあ両立させてました。

図録について
――今はもう全国の美術館からオファーきますよね。クリストファーさんから見ていて、何か変化を感じたりしますか？

クリストファー　日本の図録と長く関わってきましたが、政治的なものはほとんどないし、不自然ですよね。現代美術についても、未だに「難しい」とか言われる。難しいことはないでしょう？　文章が読みやすくなってるとは思います。昔に比べて、普通の人が読んで楽しめるようにはなっていると思う。でも日本語って本当になんか、もう考えられないような曖昧さがあるじゃないですか？　英語にするのにとても悩むことがありますね。翻訳の過程で「これだと曖昧ですよ」と指摘しても、ちゃんと対応してもらえないことがあって、これには困りました。以前経験したことで言えば、「古い」という言葉に対して、ある文脈の中で、とても曖昧に使われていた。これではわかりませんよ、伝わりませんよ、もっと時代を特定できるはずだから、「古い」ではなく、明確にしてくださいと指摘したのですが、反映されることはありませんでした。これは理解できませんでしたね。日本語としても曖昧にしか伝わらないし、英語で正しく伝わるかどうかは問題じゃないように思っていると感じました。展覧会のタイトルや文章そのもの、言葉に対して、こだわりが少ないように感じます。でも図録は誰が読むの？　一般の読者ですよ。展覧会の英語のタイトルで、「これ、間違ってます」と指摘しても、「そのままでいい」とか「もう訂正できない」とか言われてしまうことがあって、これにも驚きましたね。間違ったままでいいというのはどういうこと？　僕は 50 年以上も英語、使ってるよ（笑）。その僕を信じないのだから、どうかと思う。もちろんチェックは重要です。僕も間違えることはあるし、英語の校閲、チェックを入れる必要があると思って（そういう人を）推薦するんですけど、まだ少ないね。例えば『From Postwar to Postmodern: Art in Japan 1945-1989: Primary Documents』（MoMA Primary Documents）を前やってたんですけど、翻訳は僕だけではないですが、あれは 5 年かけて作ったものだから、チェックもいっぱいあった。残る本を作ろうと思ったら、そうなるでしょう。図録は、研究者のためにも作るものですから。

――クリストファーさんは、小説とか文学の翻訳の仕事はされないですか？

クリストファー　美術の翻訳はやっぱりお金がいいから（笑）。もうひとつ、美術の方がね、特に速くできるし、同時にいろんな仕事が出来るからね。でも、もともとはやっぱり文学に興味があった。だから、できたら澁澤（龍彦）とか（稲垣）足穂なんか、もうそのへんがやりたいなあと思ってたんですが、これ

はお金にならないよ。お金が一番大事とは言わないまでも大事なんですよ。

――図録の英訳を読んで、読者から何かリアクションがあったりしますか。

クリストファー　反応はないですね。3 回ぐらいあったかな。役立ったとかそういうふうに言われることはあるんですけどね。

翻訳家の生活

――21、22 歳で来日して、最初から関西ですか。

クリストファー　ええ、最初は羽曳野なんです。さっき言ったみたいに一度ワシントン D.C.の大学院に 1 年いたけど、やっぱり日本に帰りたい、そういう気持ちが高まって、それで 22 歳の時に、日本に帰ってきました。もうそれからずっと関西に住んでいますね。日本に着いてすぐ、岸和田に仕事を探しに行こうとしたんですよ(笑)。ディープ大阪がもともと好きだったんです。そしたら、途中で、たまたま、電車のホームで立ち話をした男の人から「ちょっと呑まないか」と誘われて、そのまま呑みに行くことになり、「住む家がないなら、うちに住んだらいい」と言われて、羽曳野市のその人の家の 2 階に下宿することになった（笑)。アメリカではありえないね。そこに半年くらいいたかな。それから堺に移り、神戸にも住んだ。ずっと関西ですね。

――ここには長いんですか。

クリストファー　震災の前から香櫨園のこのあたりに居るから。少しここから行ったところに図書館があるでしょう。以前はその近くに住んでいた。インターネットのまだない頃はその図書館によく行って、花とか魚の種類とか、いろんなことを調べて、大変だった。必要な資料が必ずあるとは限らないし、時間もかかるし。コンピュータを始めて買ったのは ClassicⅡで、そうそう、これも XEBEC の関係で半分出してもらったな。やっぱり XEBEC にはすごくお世話になってますね（笑)。95 年に震災にあって、家が半壊になったから、大家さんが今のこの家を紹介してくれて、そこからもう 30 年近くになるね。

――朝は何時に起きますか。

クリストファー　ふだんは朝の 4 時半に起きます。それからバナナとヨーグルトを食べて 4 時 45 分には家を出て夙川沿いをウォーキング、散歩しますね。ササッ、モグモグモグってあっという間に食べます（笑）。それで 1 時間くらいは歩いて、それからコーヒーを淹れて、仕事を始めます。長年、仕事中、音楽は流してましたが、コロナ時代に入ってからなぜかやめましたね。聴く時にはジャンルはなんでも。ロックも聴くし、ファンクやジャズも好きですね。ヘッドホンは使わない、耳に悪いからね。だからウォーキングの時は音楽は聴かないです。自然の音で十分ですね。いろいろ考えることもできるし、音楽は家に帰ってから聴けばいいでしょう。昼は、サンドイッチを作って食べます。近くに美味しいドイツパンの店があるんですよ。毎週金曜にそこに買いに行く。夜は、午後 6 時には必ず仕事を終えます。それから好きな音楽を、この 1 階のステレオで聴いてますね。本を読んだり、映画を見たり、たまにギターを弾いたりもしますけど。基本、自炊ですが、友達が来たら、外食ですね。食べ歩き、好きですよ。ベジタリアンなんですが、食べるのはとても好きですね。健康ですね。体重も全然変わってないし。夜はそんなふうにのんびり過ごして、夜の 10 時半には寝ます。

――ベジタリアンになったのはいつですか。

クリストファー　大学生の頃に友達がいて、僕よりちょっと若い人で、やっぱりパンクの友達です。彼、本当に行くとこないから僕のアパートによく泊まりに来ていて、ご飯作ってくれるんですが、彼がベジタリアンだった。料理がうまくて、「そうか、まあそれもいいかもね」と。それ以来、そのままベジタリアンになった。動物が好きで、できたら殺したくないみたいな意味もありますよ。健康的だと彼が言ったし、「一緒に食べるんだったら、その方が簡単かな」と思って、それからそのままです。マクドなんて 18 歳から食べてない。美味しくないし。でも、前にアメリカに帰ってみたら、その彼が結婚していて、子供がいて、全然ベジタリアンじゃなくなってた！（笑）まあでも僕も人のことは言えない。数年前に、革ジャンを買ってしまったから（笑）。かっこいいし、着たいなと思ってね。

（了）

本インタビュー原稿は、『遠距離現在　Universal/Remote』（国立新美術館）関連イベント 『トークパフォーマンス　福永信　ひとり対談　クリストファー・スティヴンズとは誰か？　福永信が迫る、アートカタログ翻訳者の人生』（2024 年 5 月 11 日（土）14:00-15:30 研修室 A,B）で参加者に配布された。

Christopher Stephens
1964 年、カリフォルニア生まれ。関西に 38 年滞在。70 年代後半、パンクノイズの 3 ピースバンド Assholes のオリジナルメンバーとして活動。1997 年から英字情報誌 Kansai Time Out の編集に携わった。2003 年から 2009 年の休刊まで同誌の編集長を務めた。翻訳家としては、国立国際美術館、国立新美術館、北海道立近代美術館、滋賀県立美術館、東京国立近代美術館、京都国立近代美術館、東京国立博物館、グッゲンハイム美術館、MOMA など国内外の多数の展覧会カタログの英訳を手がける。主要訳書として、『石内都 肌理と写真』、『ビターズ 2 滴半 村上三郎はかく語りき』（坂出達典）、『GENKYO 横尾忠則Ⅱ works 原郷から幻境へ、そして現状は？』など。最新の翻訳に『三島喜美代―未来への記憶』、『田名網敬一　記憶の冒険』。